綱敷天神社（つなしきてんじんしゃ）　社報　第一三八号

喜多埜（きたの）

〜 難波八十島祭（なにわやそじまさい） 〜

先月八日、天皇陛下御自ら、「象徴としてのお務めについてのお言葉」を、テレビ放送を通じて日本国民にお気持ちとして宣り給われました。明確な文言としては組み入れられませんでしたが、陛下の譲位（生前退位）についての深い思いが伝わるものであったと思います。

そうした皇位の代替わりの際に執り行われるのが、即位の礼と大嘗祭という神事ですが、実は平安時代まで、この即位の礼の翌年、天皇の使いが大阪 難波津に赴き、八十島祭という神事を行う事が倣わしでした。

この神事は、淀川が運ぶ土砂によって、大阪湾に島が出来ていく様を、国土生成に見立てて、国土の神霊を新しい天皇の御衣に乗り移らせ、新時代も国が広がりゆくよう祈念する神事であったと考えられており、記録上は第五十五代天皇の文徳天皇さまの嘉祥三年（八五〇）九月八日に執り行われたのが最古の記録で、鎌倉時代の元仁元年（一二二四）まで、記録上二十二回確認されています。

この八十島祭の場所については諸説ありますが、当時の地勢などを考えると、古くはこの梅田界隈で執り行われていたものと考えられており、後年、斎場は住吉の方へと南下していったと考えられています。

この度の陛下のお言葉を受けて、これからの新時代、そして歴史の積み重ねに思いを致す時、太古の梅田は新時代の幕開けに重要な霊地であっといえるのかもしれません。

〜 上棟祭について 〜

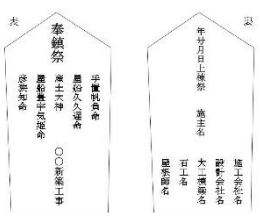
今からちょうど三百年前の享保元年九月二十四日、当宮御本社の本殿が再建されました。なぜ日にちまでしっかりとわかるかと言いますと、この時の棟札（むなふだ）が今も残っている為です。

棟札とは建築工事のちょうど中間点にあたる棟上げ（上棟祭）の時に棟木に据え付けるもので、大きな木札のようなものです。棟札には神さまの御神名と携わった人々の名前など記します。

この棟札は、建物がある間は目にする事はほぼありませんが、その建物が無事に役目を終え、解体する時にはじめてその姿を表します。その時に、その建物を建てた時の人々の事がわかるというもので、一種のタイムカプセルのようなものともいえなくありません。

棟上げの神事自体は、昔は工匠の祭りと呼ばれ、棟木には棟木飾りを取り付け、施工業者が主体となって盛大に行う事が多かったのですが、木造から鉄筋コンクリートが主流になった事で、そうした神事に通じていた大工の方もおられなくなり、昨今では滅多に執り行われなくなりましたが、神事までは難しくとも、せめてこうした棟札を作り、建物が永くあり続けますようにという祈る心は大切にして欲しいものです。

また、上棟は棟を上げると共に、家運社運も上げるという意味もあります。建物の建ち上がりを施主、施工、近隣、関係者みんなと共に喜ぶ。そういった「お陰さま」の心を育む場として、コミュニケーション不足が深刻な現代にこそ本来必要な神事なのかもしれません。



棟札

棟木飾り（関西式・幣束とも）

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、au、モバイルPC　対応

編著　綱敷天神社　禰宜（ねぎ）（神主）
白江　秀知